

九州天皇家論 2章 天孫降臨

出雲王朝征服譚

天孫降臨の「高千穂の峯」は 足立山

日本書記神代下は、天孫・瓊瓊杵尊の降臨物語と「木花開耶姫」とのあいだにできた子ども、「海幸」「山幸」兄弟の物語である。天照大神は孫の瓊瓊杵尊に「豊葦原中國」を統治させようと考えた。だが、その國は大国主命が統治する國だった。出雲王朝は天照大神の弟、素戔鳴尊が啓いた王朝である。いわば分家といえる。何度か使者を送るが、悉く失敗する。そこで最後に次の武将を派遣することになる。

是の後、高皇産靈尊、更に諸神を曾へて、當に葦原中津に遣すべき者を選ぶ。尙曰さく、「磐裂根裂神の子磐筒男・磐筒女が生める子経津主神、是佳けむ」とまうす。時に、天石窟に住む神、稜威雄走神の子甕速日神、甕速日神の子、漠速日神の子、武甕槌神有す。此の神進みて曰さく、「豈唯経津主神のみ大夫にして、吾は大夫にあらずや」とまうす。其の辞氣概し。故、以て即ち、経津主神に配へて、葦原中國を平けしむ。

二の神、是に、出雲國の五十田狹の打汀に降おりて、即ち十握劍を抜きて、倒に地に植てて、其の鋒端に踞て、大己貴神に問ひて曰はく「高皇産靈尊、皇孫を降しまつりて、此の地に君臨はむとす。故、先ず、我二神を遣わして、驅除ひ平定めしむ。汝が意何如。避りまつらむや不や」とのたまふ。

(古事記上巻)

選ばれたのは彦島・小戸の神の子「経津主神」である。もう一人は「天石窟」に住む神の子「武甕槌神」である。どちらも「天(彦島)」の武将・神である。この二人が出雲の「五十田狹の小汀」に降って、大己貴神(大国主命)に國譲りを迫る。天照大神から領土譲渡交渉を任された二人の神は云う。

故に大国主神に問ひて言りたまひしく「天照大御神、高木神の命を以て、問ひに使はし賜ひき。汝が宇志波ケル浅原中國は、我が御子の知らず國ぞと言依さし賜ひき」故、汝が心は奈何に。

(古事記上巻)

「葦原中國」は女王「豊」の國

天照大神は、何故、この國の統治権を主張できたのか。その理由はこの國の名前に表れている。「豊葦原中國」とは「女王豊の葦原中國」という意味の国名表記である。

「葦原中國」は彦島、「伊豫二名嶋」の女王「豊」が元々支配していた國だ。国名にそれが表れている。そして女王「豊(伊豫)」から統治権を引き継いだのが私、天照大神だ。故にこの國を私に返せ。

天照大神はこのように自らの統治権を主張したのであろう。関門海峡には「豊」の國が幾つか存在した。筑紫

嶋の「豊國」、「大倭豊秋津嶋」はいずれも彦島に君臨した女王「豊(もう一つの名前は伊豫)」が支配していた弥生国家だった。「葦原中國」も女王「豊」が支配していた國だった。ゆえに「豊の葦原中國」という國名が付けられていた。

大國主命は「やむなし」と答えた。軍事衝突は建御名方神と建御雷神との間で起った。「科野国・州羽の海」で出雲王朝の建御名方神は敗れる。そして統治権は大國主命から天照大神に移る。大國主命(大己貴神)は「出雲國の多芸志(たぎし)の小濱に天の御舎」を造って隠遁することになる。こうして、遂に、天孫瓊瓊杵尊が豊葦原中國に降ることになる。しかし、そのルートは山道である。山道を進み、山頂から國の姿を見た。その國見の山が「筑紫日向高千穂久士布流多氣」である。日本書紀では「日向の襲の高千穂」と書かれている。

時に、高皇産靈尊(たかみむすひのみこと)、眞床迫衾(まどこおふふすま)を以て、皇孫天津彦火瓊瓊杵尊に覆(おほ)ひて、降(あまくだ)りまさしむ。皇孫、乃ち天磐座(あまのいはくら)を離(おしはな)ち、且(また)天八重雲を排分(おしわ)けて、稜威(いつ)の道別(ちわけ)に道別きて、日向(ひむか)の襲(そ)の高千穂峯に天降(あまくだ)ります。既にして皇孫の遊行(いでま)す状(かたち)は、櫛日(くしひ)の二上(ふたがみ)の天浮橋(うきじまりたひら)に立たして、簀(そ)の空國(むなくに)を、頓丘(ひたを)から國覓(くにま)ぎ行去(とほ)りて、吾田(あた)の長屋(ながや)の笠狭崎(かささのみさき)に到ります。(日本書紀)

「千穂」とは「稲穂」の意

瓊瓊杵尊が「降臨」したのは日本書紀では「日向の襲の高千穂峯」と書かれている。古事記では「筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣」である。どちらも「高千穂」である。「高千穂」は、通常、「高い山」と考えられている。確かに「高」は「高い」という意味である。ところが、「千穂」とは「山」の意味ではない。

「日向國風土記」には「高千穂」の地名説話がある。この風土記の「日向國」とは宮崎県ではない。「天(あま)」王朝の「日向國」である。

日向の國の風土記に曰わく、曰杵(うすき)の郡の内、知鋪(ちほ)の郷。天津彦々火瓊瓊杵尊、天の磐座(いはくら)を離れ、天の八重雲を排(おしわけ)けて、稜威(いつ)の道別き道別きて、日向の高千穂の二上(ふたかみ)の峯に天降りましき。時に、天暗冥(くら)く、夜昼別けず、人物道を失い、物の色別き難たかりき。ここに、土蜘蛛、名を大鉏(おほくわ)・小鉏と曰ふもの二人ありて、奏言ししく、「皇孫の尊、尊の御手以て、稲千穂を抜いて粃(もみ)と為して、四方に投げ散らしたまはば、必ず開晴(あか)りなむ」とまをしき。時に、大鉏等の奏ししが如、千穂の稲をてもみて粃と為して、投げ散らしたまひければ、即ち、天開晴り、日月照り光さき。因りて高千穂の二上の峯と曰ひき。後の人、改めて智鋪(ちほ)と号く。(「日向國風土記」)

「千穂」には「山」という意味はなく、漢字の如く「稲穂」の意である。「千」は「たくさん」の数である。「千穂」とは多くの稲穂をこの山の嶺で投げたという古事から付けられた地名である。この故事に因んで、「高千穂」は「日向の國の曰杵の郡の知鋪の郷」という名前の邑となったのだと風土記は記録している。日向國風土記では「高千穂の山」が存在した國は「日向國」と云われていたことになる。

「日向」の意味は「西」

「日向」とはいかなる意味か。イザナギが黄泉から逃げ帰ってミソギをする場所の表記に「日向」がある。その場所は「筑紫日向之橋小門之阿波岐原」という。この地は特定できる。西井氏(古田史学の会)の解析がすでにある。

では、イザナギ尊はどこにいたか。

答は「橋の小戸」、黄泉から逃げ帰ったイザナギ命がミソギをしたと記す地である。

私はその「小戸」を下関市街地と彦島とを隔てている狭い海峡、今でも土地の人が「オド」と呼ぶ小瀬戸のこととする。だから、記紀のもと(つまり種本)になった原伝承はこの小戸近辺にいた氏族のものであったとの前提で記紀の記事を解する。記紀はそれらの事績をあたかも全国各地のもののように描く

が、源は穴戸彦島の伝承と受けとめる。だから、小戸の頭につく「竺志日向」も伝承が生まれた太古の彦島では、小戸の橋の周りの地域が「タケ志」の「ヒ(イ)・ムコ」と呼ばれていたとみる。
竺志は九州、日向は宮崎県と受け取るのは、それが記紀編者の狙いではあるが、八世紀以降の知見に基づく解し方である。

「葦牙彦舅は彦島(下関市)の初現神」(古田史学会報No97) 西井健一郎

西井氏は「イザナギの故地・竺紫日向之橋小門之阿波岐原」を下関小戸地区と特定している。この特定は正しい。だが、「筑紫」「日向」「橋」「阿波」については正確な読みがなされるべきであろう。

(1) 「日向」とはその漢字が表記するように、「日が向かう」という意味である。「日に向かう」ではない。「日が向かう」とは太陽が落ちていく方角で、西という意味である。太陽が昇り、落ちていく方角は古今東西変わりなく絶対である。この絶対認識に基づいて古代人は太陽が昇る方角を「日」といい、太陽が落ちる方角を「日向」といったのである。だが、問題はどこを起点として「日向(西)」と云うかである。私は今大阪にいる。姫路は西である。しかし私が博多に居るならば姫路は東となる。「日向」だけでは位置は特定できない。故に伊邪那岐命が禊ぎを行った場所は「筑紫の日向だ」と起点を明示しているのである。これは「筑紫」を起点としてその西の方角」という意味である。

(2) この使用法は、「東(あずま)の國」に対する「西の國」という対の表記である。世界を東と西に別ける認識方法である。現代において「東日本」「西日本」と分ける認識方法と同じである。尚、日本列島はどちらかというと東西に分けるより、南北に分けた方が地理的にはあっている。しかし「東日本」「西日本」と分けているのはこの当時の認識方法を今なお継承しているからである。

(3) 「橋」とは本来は「立鼻」の意である。土地(島)形状が人の鼻に似ているのでこの名前が付いた。この場所は彦島老町である。「天(あま)」王朝では、「橋」といえば、それは彦島老町をさす。これは一貫する。

(4) 「阿波」とは「粟」とも表記されている。伊邪那岐命の國生みでは、「伊豫二名嶋」には四つの弥生国家があった。その中の一つが「阿波(粟)」である。「阿波」とは元々は「泡」であろう。彦島小戸は潮の流れが速く、潮は直角に曲がり、岸にぶつかり泡となる。その様が国名「阿波」となった。國生みの「阿波」は彦島老町に存在した弥生集落である。伊邪那岐命が帰ったのは「高天原」が存在した彦島の「阿波國」であった。伊邪那岐命は母国に帰っていたのである。

「筑紫・日向」とは「門司港の西」

では「筑紫」とはどこか。西井氏が云うように、「筑紫」を九州全体と理解するのは後世の理解である。また「筑紫」を福岡県と理解するのも後世の理解である。では伊邪那岐命が禊ぎをした彦島小戸の住所表記に使用された「筑紫」とはどこをさすのか。

「竺紫日向之橋小門」とは「筑紫の西にある彦島小戸」という意味である。当然ながら、「筑紫」は彦島小戸の東に位置する國となる。彦島の東に存在した「筑紫」とは「州生み」説話に登場する「筑紫國」である。古代の「筑紫國」とは旧門司区(門司港)をさす。

故に「筑紫の日向」とは、現在の地名でいえば、「門司港の西」という意味となり、「竺紫日向之橋小門」とは「門司港の西に存在する彦島の小戸」という意味となる。伊邪那岐命が禊ぎをした場所は、「門司を起点とした西の彦島」と正確に住所表記されている。

「筑紫・日向・高千穂」も同じ認識に立っている。「筑紫の西に位置する高千穂」という認識である。だが、「筑紫(門司)の西」とは彦島に限らない。もっと広域をさし、門司港の西の門司区、小倉北区を含む。

豊前風土記

天孫降臨の物語は「豊前」風土記にも記録が残されている。

豊前國風土記 宮処郡

豊前風土記に曰く、宮処の郡。古、天孫、此处より発ちて、日向の旧都に天降りましき。蓋し、天照大

御神の神京なり。

「豊前」の「豊」とは古代「伊豫二名嶋」に君臨した女王の名前である。彼女は「伊豫」と呼ばれ、また「豊」とも呼ばれた。この女王が支配した嶋が「伊豫二名嶋(彦島老町)」だった。従って「豊前國風土記」とは彦島・老町の風土記なのである。この「豊前」を大分県と考えてはならない。天照大神は彦島老の山に居た。ここが「高天原」と呼ばれた高地性弥生集落であった。天孫ニニギの尊は「天照大御神の神京」だった彦島の「宮処の郡」から「日向の旧都」に降臨した。風土記はこのように記録している。

風土記は天孫ニニギが向かった先を「日向の旧都」という。この使用法も「日向(西)」とはただ「西」という意味ではなく、古代「筑紫國」から見て「西」という意味である。ニニギは彦島の「宮処の郡」から「筑紫の西」に向かった。この「筑紫の西」とはどこか。彦島の対岸小倉北区である。天孫は彦島を離れ、嘗て女王「豊」が支配していた國、小倉北区に侵攻したのである。

この「日向(小倉北区)」を風土記は「旧い都」とであると記録している。この認識はむしろ「新しい都」を前提としている。「新都」とは神武が開いた都をさす。古事記では天孫の次に新しい都を拓いたのは神武である。風土記は神武の都を新都と想定して、日向(小倉北区)を「旧都」といった。神武はこの「旧都」・日向」に居た。そして神武は「旧都・日向」から東征に出発したというのが風土記編者の認識だったのである。



天津久米命は神武の兵の祖

天孫降臨とは新しい弥生国家建設の物語である。天照大御神はニニギ尊を派遣する時、「天忍日命」と「天津久米命」に先導させた。この二人は武人である。「天忍日命」は、大伴連の祖先と、割注に補足があり、「天津久米命」には、久米直の祖先と補足がある。「久米」とは後の神武東征の時に従った部族であった。神武歌謡で「久米の子」と歌われた部族が「久米」で、彦島の海部集団だった。これらの武人が従ったのは当然であるが、天照大御神はその他の職業人も随行させている。

國作いの職業集団

爾に天兒屋命、布刀玉命、天宇受売命、伊斯許理度売命、玉祖命、併せて五伴緒を支ち加へて、天降したまひき
(古事記・天孫降臨)

これらの人々は何人か。頭注は「伴または部は同一職業団体、緒は長」としている。天兒屋命とはどんな職だったのか。建築を担っていたのであろうか。布刀玉命はその字から考えて「機織り」「刀鍛冶」「工芸品技能工」であろう。天照大神が岩屋に隠れた時、踊った「天宇受売(あめのうずめ)命」は何の仕事であろうか。女官或いは産婆であろうか。

とにかく弥生国家(弥生集落)建設には多様な職業集団が必要である。天照大御神はニニギを「葦原中國」へ向かわす時、これらの技術者、技能者、女官を同行させて新しい國造り(弥生集落の建設)を行わせたのである。彼らは彦島の「天(あま)」から出国した。向かった先が「筑紫・日向・高千穂」だった。

筑紫日向高千穂は足立山

「筑紫・日向・高千穂」は、「筑紫・西」の「高い千穂」という地名表記である。「千穂」は「山」を表すのではなく元々は、稲穂を投げ散らした故事によって、「千穂」と名付けられた地名である。しかしその場所は高い山の上だったので「高千穂」となった。日本書紀神代下では、「筑紫の日向の高千穂のクシフル峯」と表記されている。この意味は「筑紫・西・高千穂のクシフル峯」という意味である。「一書(あるふみ)」が幾つかある。

- 一書 日向のクシ日の高千穂の峯……………日向(西の國)の「クシ日」の「高千穂」の峯
- 一書 日向の襲の高千穂のクシ日の二上峯……………日向(西の國)の「襲」の國の「高千穂」の二つの峯
- 一書 呼ひて日向の襲の高千穂の添山峯……………日向(西の國)の「襲」の國の「高千穂」の添える峯

「一書」の住所表記はやや乱れている。だが全てにほぼ共通する表記は、「高千穂の峯」である。「千の稲穂」を投げた故事をもって山の名前とした。ただ、一般的に「高い山」という意味で使われているのではない。

「一書」には、「日向の襲の高千穂のクシ日の二上峯」という表記がある。これを解説すると、「日向の襲の國の高千穂のクシ日の二上峯」となる。「日向」は「筑紫の日向」と同じである。「襲」とは「熊襲」である。従って、「熊襲が支配する高千穂のクシ日の二上峯」という意味となる。

「クシ」は「筑紫島」の國生み神話に登場する「肥國」の別名にその名前が登場する。「肥國」の別名は「建日向日豊久土比泥別」である。その解説は「熊襲・西・豊・クシヒ嶺・別」で、「熊襲の西に存在する豊國のクシヒの山の分國」という意味である。「クシ」は「久慈」と同じ意味で地名であろう。

「二上峯」から判断できるのは、峯は二つある。前出の「日向國風土記」の「日向の高千穂の二上(ふたかみ)の峯に天降りましき。」という表記と一致する。

「日向の高千穂の二上の峯」とは足立山

さて、この「天孫降臨」で有名な山はどの山か。本居宣長を始め、古来数多くの学者が特定してきたのは宮崎県高千穂である。しかし、これは現代地名を優先して場所を特定するという方法上の誤謬に基づく特定である。宮崎県高千穂は天孫降臨と全く関係ない。

(1) 「筑紫の日向」とは「橘の小戸(彦島・小戸)」を表す地名表記の「筑紫・日向」と同じように使われている。その意味は「筑紫の西」という意味を持つ。この「筑紫」とは古代「筑紫國」で旧門司(門司港)をさす。

(2) 瓊瓊杵尊は天照大神の「宮処(彦島・老の山)」から出発した。そして「筑紫日向(門司の西)」に降臨した。彦島も「筑紫日向(西)」と表記されているが、天孫が降臨した「筑紫日向」は彦島ではない。彦島と同じように「筑紫(門司港)の日向(西)」に当たる門司区または小倉北区である。

(3) この山は二つの峯を持つ。

(4)「葦原中國」を見下ろす山である。

以上の条件で、シミュレートして浮かび上がる山はどの山か。「筑紫日向の高千穂の峯」とは「足立山」である。もう一つの嶺とは「妙見山」である。



高千穂の嶺
(足立山)

(adajp2001.web.infoseek.co.jp/kinkou/adayam/adayam.html - キャッシュ)

瓊瓊杵(ニニギ)尊は「高千穂・クシフル岳」から降り、その地方の開拓に力を尽した。故にその國の名前を「ツクシ」と云うのだと地名説話が伝わる。「ツクシ」とは門司である。昔からの良港をさらに発達させたのであろう。

小倉北区には足立山妙見宮がある。神殿の額には「御祖神社」が掲げられている。「御祖」とは瓊瓊杵(ニニギ)尊のことであろう。足立山妙見宮に瓊瓊杵(ニニギ)尊が祀られるは当然である。ここが天孫降臨の物語の舞台だからである。



足立山妙見宮